

Title	初期アメリカ英語の仮定法現在 --ジョン・ウィンスロップの用法分析から
Author(s)	福永, 眞理子
Citation	Zephyr (2017), 29: 30-43
Issue Date	2017-06-30
URL	https://doi.org/10.14989/227414
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

初期アメリカ英語¹の仮定法現在² —ジョン・ウィンスロップ³の用法分析から

福永 眞理子

1. はじめに

英米語法の違いの一つに、「要求・勧告・提案」などを表わす動詞・形容詞・名詞に続く *that* 節内述部の表現形態選択がある(Quirk et al. 1985: 156-7)。(1) の命令的仮定法 (mandative subjunctive) を用いるのはアメリカ英語的であり、(2) の推定的 *should* や (3) 直説法を用いるのはイギリス英語的であるという。⁴

- (1) 仮定法現在形 : e.g. ‘The employees have demanded that the manager *resign*. <esp AmE>’
- (2) *Should*+動詞の原形 : e.g. ‘The employees have demanded that the manager *should resign*. <esp BrE>’
- (3) 直説法現在形 : e.g. ‘The employees have demanded that the manager *resigns*. <esp BrE>’

(Quirk et al. 1985: 157 より引用)

Visser (1966) は、(1)の語法が初期アメリカ英語の話し言葉に用いられ受け継がれたものとする可能性を次のように述べている。

The revival, in the United States, since the beginning of the twentieth century in the written records seems to show that the idiom must have been preserved in spoken use among the Pilgrim Fathers. (843)

¹ Kytö (1991: 182, note 3) の‘Early American English’に倣い訳したもの。

² ‘Subjunctive’を「接続法」と訳す場合もあるが(たとえば、浦田 2015)、小論では「仮定法」と訳す。以下、用語の日本語訳は千葉 (2013)を参考にした。

³ John Winthrop (1588-1649): マサチューセッツ湾植民地の初代総督。後述の1637年「審問」で裁判長を務めた。

⁴ Quirk et al. (1985: 157) ‘The mandative subjunctive is more characteristic of AmE than of BrE [...] we present the patterns of preference in BrE and in AmE regarding the choice between the mandative subjunctive, putative *should*, and the indicative, in sentences such as:’と以下に示される用例(1)(2)(3)に基づく。

一方、Hundt (2009: 31)⁵は、仮定法現在形が should/shall の迂言用法よりも好んで使われるようになるのは 1950 年～1990 年の期間であり、1750 年～1899 年の期間は should/shall 構文が優勢であることから‘post-colonial revival’⁶の語法であると示す。

Görlach (1991: 113) によると、1650 年より以前の文献に仮定法が現れる頻度は著者によって異なるという。この時期にアメリカに移住したジョン・ウインスロップやそのコミュニティの命令的仮定法の用法を仮定法現在の形態が現れる可能性のある従属節⁷に拡大して観察することは、米語法起源の一端を探求する上で意味のあることだと考えた。小論では、異なるテキストタイプの文献および初期近代英語との比較によって観察できた仮定法現在の用法を報告する。用いた文献は、「アン・ハッチンソン夫人の審問」⁸（以下「審問」；*Exam.*と略す）と *Winthrop's Journal, 'The History of New England', 1630-1649*⁹（以下 *Winthrop's Journal*; *WJ* と略す）、初期近代英語との比較には Fillbrandt (2006) と Moessner (2006) の資料を用いた。¹⁰

第 2 節で統計対象とする節の定義を明示し、第 3 節で仮定法現在が現れる節タイプを概観する。第 4 節・第 5 節にてそれぞれの節タイプにみられる用法パターンを述べ、第 6 節で結論を述べる。

2. 対象節について

初期近代英語期に、仮定法と対立する形態は法助動詞と直説法であるが、形態上ははっきりと仮定法現在 vs. 直説法現在の判別が可能な

⁵ Hundt (2009: 31, Table 1.13): アメリカ英語の「命令的仮定法」vs. should/shall 構文の比率は、1750 年～1799 年=0:6、1800 年～1849 年=1:2、1850 年～1899 年=2:10、1900 年～1949 年=2:2、1950 年～1990 年=12:2 と示されている。

⁶ Hundt (2009: 31): ‘the mandative subjunctive is a clear-cut example of post-colonial revival rather than colonial lag.’ より引用した。

⁷ 中島・児馬 (1990: 143) 「仮定法は主節に現れる場合と、従節に現れる場合とがあるが、後者が圧倒的に優勢である」

⁸ ‘The Examination of Mrs. Anne Hutchinson’ タイトル訳は荒木 (2005) を参考にした。「審問記録」は「話し言葉」に属するテキストタイプとして分析をした。Cf. Culpeper & Kytö (2010: 1-19); Rissanen (1999: 284)

⁹ 1630 年～1640 年の記録と ‘A Short Story’ の一部が収録されている Dr. Hosmer による編集 (1908 年) の再版 (2005 年) の ‘Volume 1’ を用いた。データ分析には *Internet Archive* の 1908 年版テキストから Dr. Hosmer の ‘Introduction’ と注釈を除いた部分を使用した。

¹⁰ Fillbrandt (2006) より that 節内の命令的仮定法について、Moessner (2006) より if などの副詞節における仮定法について、それぞれ Helsinki Corpus (HC) ‘E2 Period (1570-1640)’ の分析資料を主に用いた。

パターンは次の対立に限定される。¹¹

(4) 仮定法現在 vs. 直説法現在 :

A. 定動詞 : he/she/it/thou have vs. he/she/it has/hath; thou hast/havest

B. Be 動詞 : I be; thou be; he/she/it be; we/you/they be vs.

I am; thou art; he/she/it is; we/you/they are

対象節の抽出条件は、Fillbrandt (2006)および Moessner (2006)に規定されている条件にあわせ、以下の通りとした。用例の斜字体・下線は特に注釈のない限り著者によるものとする。

(5) 「対象節」の定義 : (6)の主節述部表現 (Fillbrandt 2006: 142-3) に導かれる that 節(zero that 節を含む)あるいは(7)の従属接続詞 (Moessner 2006: 249) に続く副詞節に、「3 人称単数主語¹²+仮定法現在・法助動詞・直説法現在のいずれかの形態をもつ述部」が現れる節。法助動詞は「主要法助動詞 (can/could, may/might, must, shall/should, will/would)¹³+動詞の原形」の構文をもつ「助動詞構文」とする。¹⁴

(6) That 節を導く「述部表現」(以下、「動詞」)¹⁵ : (be) sure¹⁶, desire, exhort, expect, find, hear, intend, look, order¹⁷, provide, request, say, see, suppose,

¹¹ 「初期近代英語期」は、Rissanen (1999: 187)に基づき c 1500-c 1700 とする。「仮定法」の定義は ‘The subjunctive’ (Rissanen 1999: 227-31) を参照した。意味的に曖昧な例を排除するため、「明示的な形態」に限定した。

¹² Fillbrandt (2006)および Moessner (2006)は、thou 主語を対象にしているが、「審問」と *WJ* の対象構文に thou 主語の該当例はない。

¹³ Fillbrandt (2006)および Moessner (2006)には対象の法助動詞が明示されていないため、主要法助動詞(Rissanen 1999: 231)とした。

¹⁴ 従って、次のような例は「対象外節」とし統計に含めない。(a) 3 人称単数主語以外の主語節: e.g. I desire that particular witnesses be for these things that they do speak. (*Exam.* 332); (b) 「主要法助動詞」以外の助動詞構文: e.g. if she in particular hath disparaged all our ministers in the land (*Exam.* 318)/if Mr. Cotton do hold forth things (*Exam.* 347); (c) 主語もしくは述部のない節: e.g. if not necessary (*WJ* 275)

¹⁵ 初期近代英語期に「that 節+仮定法現在形」との共起が確認されている63種類の動詞 (Fillbrandt 2006: 142-3, Table 1) の全ての語形 (e.g. find=finds, found, finding, to find) について、小論対象文献で「that 節(zero that 節含む)+3 人称単数主語現在」と共起している用例を抽出した。

¹⁶ 次の名詞句を含む—if she had not a sure word that England should be destroyed (*Exam.* 338).

¹⁷ 名詞 order を含む。

swear, tell, think

- (6-a) 仮定法現在: e.g. I exhort you brethren, etc., that there *be* no division among you... (WJ 230)
- (6-b) 助動詞構文: e.g. The Court had ordered that shee [sic] *should return* to... (WJ 249)
- (6-c) 直説法現在: e.g. I think that this carriage of your's [sic] *tends* to further casting dirt upon the face of the judges. (Exam. 331)
- (6-d) Zero *that* 節: e.g. [...] and that their order was, [...] they would assemble upon the deck, and one *sing* a song, or *speak* a few senseless sentences, etc. (WJ 96)¹⁸

(7) 副詞節を導く従属接続詞¹⁹ :

[条件] if, as if, unless, provided

[譲歩] though, although

[目的] so that, lest

[時] till, until, when, before, after

(7-a) 仮定法現在 : e.g. if the court *require* it. (Exam. 348)

(7-b) 助動詞構文 : e.g. If a magistrate *shall*, in a private way, *take away* a man's goods or his servants, etc., (WJ 257)

(7-c) 直説法現在 : e.g. If the court *calls* us out to swear (Exam. 346)

(8) 否定構文²⁰:

(8-a) 仮定法現在 : 「not + 定動詞」「not +be」 e.g. If the court *be not satisfied* they may have an oath. (Exam. 327)

(8-b) 助動詞構文 : 「法助動詞+ not」 e.g. If the country *will not be satisfied* [...] (Exam. 332)

(8-c) 直説法現在 : 「do not + 定動詞」「定動詞+not」 e.g. seeing the scripture *doth not declare* it [...] (WJ 201)

¹⁸ 主語 ‘their order’に続く zero that 節には3つの節が含まれていると解釈できるが、‘they would assemble’は、3人称複数主語のため対象外節とした。

¹⁹ 従属接続詞の意味は、Moessner (2006: 249); Rissanen (1999: 302-15); Visser (1996: 861, 862, 867, 868, 874, 886, 902) を参照した。「審問」と WJ には provided, after, until の該当用例なし。Whether に仮定法の生起例があったが Moessner (2006) との比較のため対象外とした。

²⁰ Quirk et al. (1985: 156-7)に基づき not と定動詞・be 動詞の位置で判断した。

3. 仮定法現在が現れやすい節タイプについて

対象節 213 例²¹について、「審問」(1637 年)²²、*Winthrop's Journal (WJ: 1630 年～1640 年)*²³と初期近代英語 (HC E2: 1570 年～1640 年)²⁴ それぞれの that 節と副詞節に生起する表現形態別の分布を表 1 に示す。仮定法現在では that 節より副詞節に多く現れ、HC E2 の仮定法現在の 1 万語あたりの調整頻度との比較では、「審問」は that 節で少なく、*WJ* は that 節・副詞節の両方で少なく、それぞれ有意な差²⁵がある。

表 1. 「審問」、*WJ*、HC E2 の that 節・副詞節における形態分布・調整頻度

that 節	「審問」全体		<i>Winthrop's Journal</i>		HC E2 (*1)	
	粗頻度	頻度/1万語	粗頻度	頻度/1万語	粗頻度	頻度/1万語
仮定法現在	1 (3.45%)	0.76	3 (4.28%)	0.31	69 (12.83%)	3.64
助動詞構文	12 (41.38%)	9.12	64 (91.43%)	6.64	168 (31.23%)	8.85
直説法現在	16 (55.17%)	12.16	3 (4.28%)	0.31	301 (55.95%)	15.86
合計	29 (100.00%)	22.03	70 (100.00%)	7.26	538 (100.00%)	28.35

*1: Fillbrandt (2006: 144, Table2) の粗頻度を基に著者が 1 万語あたりの頻度を算出したもの。

副詞節	「審問」全体		<i>Winthrop's Journal</i>		HC E2 (*2)	
	粗頻度	頻度/1万語	粗頻度	頻度/1万語	粗頻度	頻度/1万語
仮定法現在	25 (69.44%)	18.99	10 (12.82%)	1.04	247 (56.78%)	13.01
助動詞構文	4 (11.11%)	3.04	58 (74.36%)	6.01	80 (18.39%)	5.69
直説法現在	7 (19.44%)	5.32	10 (12.82%)	1.04	108 (24.82%)	4.21
合計	36 (100.00%)	27.35	78 (100.00%)	8.09	435 (99.99%)	19.68

*2: Moessner (2006: 251, Table 2a) の粗頻度を基に著者が 1 万語あたりの頻度を算出したもの。

²¹ That 節 99 例 (*Exam.* 29 + *WJ* 70 例) + 副詞節 114 例 (*Exam.* 36 + *WJ* 78 例)

²² 「審問」 13,162 words

²³ *WJ* 96,450 words

²⁴ HC E2 189,800 words: Cf. Moessner (2006: 250); Nevalainen & Raumolin-Brunberg (2011), Web.

²⁵ カイ二乗検定: 対 HC E2 の仮定法現在との頻度差 $p < 0.01$ で有意差あり。

4. That 節に現れる仮定法現在について

初期近代英語 HC E2 との比較において、小論で対象節をもつ 17 種類の動詞の中で仮定法現在（4 例）が現れるのは *desire*、*exhort*、*order* に限定されている。Crawford (2009)²⁶ の「トリガー(trigger)」による考え方では、「that 節+ ‘mandates’ (仮定法現在・*should/shall*・*must/have to*²⁷)」と共起する動詞の頻度の対 ‘non-mandates’ 比率によって ‘mandates’ 表現の現れやすさを判定しており、この考えに基づいて動詞別形態の分布表にトリガーの強さを加えたのが表 2 である。

表 2. 「審問」(1637)、WJ (1630-1640)の that 節を導く主節動詞の形態別分布およびトリガー(Trigger)の強さ (3 人称単数主語現在のみ)

主節述部	「審問」				<i>Winthrop's Journal</i>				出現 頻度 合計	Crawford (2009)	
	仮定法	助動詞 構文	直説法	Mandates (*)	仮定法	助動詞 構文	直説法	Mandates (*)		Mandates (*)	Triggerの 強さ
(be) sure		1		1		1		1	2	2	100%
desire	1	3				17			21	1	5%
exhort					1				1	1	100%
expect						1			1	0	0%
find			1						1	0	0%
hear		1							1	0	0%
intend						1		1	1	1	100%
look		1		1					1	1	100%
order					2	12		12	14	14	100%
provide						1		1	1	1	100%
request						2			2	0	0%
say		2	3	1		6			11	1	9%
see		1	3	1		6	2	2	12	3	25%
suppose		2	1	1		4		1	7	2	29%
swear						1			1	0	0%
tell						7		4	7	4	57%
think		1	8			5	1	1	15	1	7%
粗頻度合計	1	12	16	5	3	64	3	23	99	32	
動詞タイプ数		9				14			17	12	

(*)仮定法現在、*Should/Should/must*の粗頻度合計

Crawford (2009: 263)は、「that 節+ ‘mandates’」との共起頻度の比率

²⁶ Crawford (2009: 259)は、‘mandates’ と共起する主節動詞・形容詞・名詞をトリガーと定義し、108 種類のトリガー(274)を用いて Longman Spoken and Written English (LSWE) Corpus (米ニュース約 5.7 百万語+英ニュース約 5.5 百万語)における対 ‘non-mandates’ との比率に基づき、「トリガーの強さ」を判定している(258, 261, 263)。

²⁷ 「審問」+WJ の対象節には *have to* の生起例はなかった。

が 65%以上の動詞を「強いトリガー」と定義している。同様の方法で、表 2 より 65%以上の「強いトリガー」を抜粋し、Crawford (2009: 274)のリストにないトリガーには「*」、生起数が 1 例しかない動詞を [] で表わしたのが (9) のリストである。

(9) 強いトリガー: [exhort*], [intend*], [look*], order, [provide*], (be) sure*

これらの強いトリガーの用例 (計 21 例) の形態別分布は、仮定法現在 3 例に対し、助動詞構文が 18 例を占める。中でも should 構文は 16 例と全体の 76%を占め、小論の文献では命令的仮定法には should 構文が好んで用いられている。

トリガー order について Crawford (2009)は、現代アメリカ英語の強いトリガーであり(264)²⁸、名詞に ‘mandates’ との共起例が多い特徴は、イギリス英語よりもアメリカ英語のほうに見られるという(263)²⁹。小論における order は名詞用法が動詞用法よりも多く(11 例 vs. 4 例)、現代アメリカ英語的な特徴をもつが、仮定法現在との共起例は、次の「順序・手順」の意味を表わす節に限定されている。

(10) It was further advertised, by some who came from Penobscott, [...]; and that their order was, as such times as other ships use to have prayer, they would assemble upon the deck, and one *sing* a song, or *speak* a few senseless sentences, etc. (*WJ* 96)³⁰

一方、次の用例にみられるような「命令」を表わす order (名詞) に続く that 節は「命令内容」が記述され should 構文が用いられている。

(11) Mr. Williams and the rest did make an order, that no man *should be molested* for his conscience, now men’s wives, and children, and servants, claimed liberty hereby to go to all religious meetings, though never so often, or though private, upon the week days; and because One Verin refused to let his wife to

²⁸ ‘[O]ne trigger exhibiting the largest difference (order as 85 per cent AmE vs. 55 per cent for BrE) is strong in AmE and moderate in BrE (Crawford 2009: 264).’

²⁹ Crawford (2009: 263) ‘AmE also contains noun complements expressed as mandates over two times more frequently than BrE (55 per cent vs. 24 per cent).’

³⁰ 前述「(6-d) Zero that 節」の例文と同じ。*WJ* では one は単数扱い。e.g. which they shot oft [sic] at our men; but, being armed with corslets [sic], they had no hurt, only one was lightly hurt upon his neck (187)

go to Mr. Williams so oft as she was called for, they required to have him [Verin] censured. (*WJ* 286)

用例 (11)に後続するジョン・ウインスロップの記述 (12)には、「intend +that 節+should」の用法がみられる。この should 構文の用法は、Quirk et al. (1985: 1182)³¹の仮定法現在形と交換可能な「推定の should」と考えられ、「意思・願望」を表わす intend に続く。

(12) But there stood up one Arnold, a witty man of their own company, and withstood it, telling them that, when he [Verin] consented to that order, he never intended it *should extend* to the breach of any ordinance of God, such as the subjection of wives to their husbands, etc., (*WJ* 286-7)

「審問」における次の look の意味は ‘make sure’ と解釈できるが、千葉 (2013: 129) によると、KJV (King James Version)において「仮定法節認可要素」の look に ‘see to it; make sure’ が付与されており、意味的にも符号するが、「審問」では should 構文と共起している。

(13) Mrs. H. I do here speak it before the court. I look that the Lord *should deliver* me by his providence. (*Exam.* 338)

残りの強いトリガー provide と (be) sure においても、次のとおり should 構文が用いられている。

(14) The rules for trading were these:—1. [...] 3. Where a man loseth by casualty of sea, or etc., it is a loss cast upon himself by providence, and he may not ease himself of it by casting it upon another; for so a man should seem to provide against all providences, etc., that he *should never lose*; [...] (*WJ* 317-318)

(15) A woman of Boston congregation, [...] so as one day she took her little infant

³¹ ‘These verbs [suasive verbs] can be followed by a *that*-clause either with putative *should* (cf 14.25) or with the mandative subjunctive. [...] it is useful to see a distinction between the “public” verbs which describe indirect directives (such as *request*; cf 14.33), and the “private” verbs which describe states of volition or desire, such as *intend* (1182).’ [斜字体は原文のまま]

and threw it into a well, and then came into the house and said, now she was sure she should be damned, for she had drowned her child; [...] (WJ 230)

Exhort は、Crawford(2009: 274)や Quirk et al. (1985: 1182)のトリガーとなる動詞リストにはない語彙だが、KJVにおいて「that 節+仮定法現在」と共起する。³² 小論にも仮定法現在との共起例が1例ある。

(16) Mr. Davenport preached at Boston (it being the lecture day) out of that in 1 Cor., I exhort you brethren, etc., that there *be* no division among you, etc. (WJ 230)

現代英語の「強いトリガーrequest」(Crawford 2009: 264)は、小論の対象節では‘mandates’との共起例がなかったが、1人称複数主語の用例には should 構文と共起している例がある。

(17) Mr. Peters. [...] She did not request us that we *should preserve* her from danger or that we *should be silent*. (Exam. 320)

OEDによると、that 節など補文節を従える request には「願望表現、厚情や許可を求める表現」として、初期近代英語期の用例 ‘Hee requested for himselfe that hee might die.’ (1611 Bible I Kings xix. 4) ³³がある。小論の対象節2例に現れる might はこの用例と考えられる。

(18) One Mr. Morris, ensign to Capt. Underhill, taking some distaste in his office, requested the magistrates, that he *might be discharged* of it, [...] (WJ 121-122)

(19) The next day the master, to pacify his men, who were in a great tumult, requested he *might be delivered* to him [...] (WJ 181)

「弱いトリガー」の desire は、「審問」におけるジョン・ウィンスロップ以外の人物の発話に、仮定法現在の用例が1例みられる。

(20) Mr. Stoughton. [...] therefore I shall desire that no offence *be taken* if I do not formally condemn her because she hath not been formally convicted as others

³² KJV, I Timothy 2: 1 (千葉 2013: 134、用例 4-12)

³³ (OED s.v. request, v¹, 1. b.)

are by witnesses upon oath. (*Exam.* 345)

Desire と最も高い頻度で共起する that 節内の表現形態は、次の用例にみられる might (16 例) である。

(21) Whereupon Mr. Knolles became very much perplexed, and wrote to the governor, acknowledging the wrong he had done us, and desired that his retraction *might be published*. (*WJ* 309)

Rissanen (1999: 285)によると、初期近代英語期の might/may は、漠然とした願望・期待を表わす従属節節に用いられる。小論の対象節に限定すると、補遺に示すように、desire, request には might 構文が現れる頻度が高い。³⁴

5. 副詞節に現れる仮定法現在について

小論における副詞節の意味別分布では、表 3 に示すとおり、「譲歩」以外は助動詞構文がより多く用いられている。これは、*WJ* で助動詞構文の比率が高いことによる影響と考えられる(表 1 参照)。

表 3. 「審問」+*WJ* における副詞節の従属接続詞の意味別形態分布

	仮定法現在	助動詞構文	直説法現在	合計
条件	23	34	5	62 (54.39%)
目的	0	7	1	8 (7.02%)
時	3	14	4	21 (18.42%)
譲歩	9	7	7	23 (20.18%)
合計	35 (30.70%)	62 (54.39%)	17 (14.91%)	114 (100.00%)

表 1 に示したように、「審問」単独と初期近代英語 HC E2 の副詞節における分布では仮定法現在が最も高い比率を占める。Moesner (2006: 256)³⁵は、テキストタイプ別の分布推移分析によって、書き

³⁴ Desire には、might だけでなく人称によっては異なる助動詞構文もみられた。たとえば、you や 3 人称複数主語には would/will、1 人称複数主語に could や should など。

³⁵ ‘The text types sermon and trial, which arguably are near the oral end of the oral/written scale and might hence be expected to show an early replacement of the subjunctive by alternative constructions, do not fulfil this expectation. [...] The

言葉よりも早く兆候が現れるはずの話し言葉に近いテキストタイプ（審問・説法）で仮定法の形態の減少がみられないという結果に基づき、話し言葉における法助動詞への交替がいち早く現れるとする仮説を支持する結果は HC では得られなかったとしている。

ジョン・ウインスロップが話し言葉の「審問」での発話時と書き言葉 *WJ* での記述時に表現形態を変えていた可能性を確認するため、「審問」(13,162 words)と同じテキストタイプの HC E2 'Trial' (14,230 words) との頻度差、および「審問」全体からジョン・ウインスロップの発話を抽出したテキスト (2,973 words)と HC H2 'Trial' との頻度差をそれぞれ比較したところ、カイ二乗検定において有意な差は認められなかった。³⁶ 表 4 に 1 万語あたりの頻度と比率を示す。これらの結果より、テキストタイプ「審問」の副詞節では、仮定法現在が好まれる傾向にあることがわかる。

表 4. 「審問」全体、「審問」ジョン・ウインスロップ、HC E2 'Trial' (Moessner 2006)の副詞節における仮定法現在の比率と調整頻度³⁷の比較

	「審問」				HC E2 'Trial'	
	全体		ジョン・ウインスロップ		Moessner (2006: 255)	
	粗頻度	頻度/1万語	粗頻度	頻度/1万語	粗頻度	頻度/1万語
仮定法現在	25 (69.44%)	18.99	7 (63.64%)	23.55	20 (71.42%)	14.05
合計	36	27.35	11	37.00	28	19.68

少ない用例数ではあるが、ジョン・ウインスロップも「審問」の発話時には仮定法現在を好んで用い、ジャーナルを書く時の副詞節における表現形態の選択パターンを変えていたことを示唆している。

6. おわりに

初期アメリカ英語の文献「審問」+ *Winthrop's Journal* (約 11 万語) においては、表現形式の選択パターンが、節タイプ・テキストタイプ

hypothesis that the decline of the subjunctive would manifest itself earlier in texts representing the oral end of the oral/written scale can therefore not be supported by the texts of HC (256).⁷

³⁶ HC E2 'Trial' に対して、「審問」全体および「審問」ジョン・ウインスロップそれぞれの仮定法の頻度は 5% 水準で有意差なし。

³⁷ 調整頻度は Moessner (2006: 255) の HC E2 'Trial' の粗頻度を基に著者が算出した。

プによって異なる傾向がみられた。

仮定法現在の形態は、that 節よりも副詞節 (if, as if, unless, lest, till, before, though) により多く現れる傾向にあることが、HC E2 との比較によって確認できた。また、同じテキストタイプ HC E2 ‘Trial’ との比較により、テキストタイプ「審問」は仮定法現在の表現形態が好まれる傾向にあり、ジョン・ウインスロップは、「審問」発話時の副詞節には仮定法を好んで用い、ジャーナルを記す時には法助動詞を好んで用いていた可能性があることがわかった。

一方、テキストタイプに関係なく that 節に命令的仮定法（仮定法現在形）が現れる頻度は HC E2 と比較して少なかった。That 節内の表現形態を Crawford (2009) による「トリガーの強さ」の考え方をを用いて分析した結果、強いトリガー-intend, exhort, intend, order, look, provide, (be) sure と共起する表現形態の中では、should 構文が最も高い比率(76%)を示した。このことから、アメリカに移住した当初は should 構文のほうを好んで使用していた可能性を示唆し、現代アメリカ英語の命令的仮定法が ‘post-colonial revival’ であるとする Hundt (2009: 31) を支持する特徴が小論分析にもみられた。

引用文献

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad & Edward Finegan. 1999. *Longman grammar of spoken and written English*. Harlow: Pearson.
- Crawford, William J. 2009. The mandative subjunctive. In Günter Rohdenburg & Julia Schlüter (eds.), *One language, two grammars? Differences between British and American English*, 257-76. Cambridge: Cambridge University Press.
- Culpeper, Jonathan & Merja Kytö. 2010. *Early Modern English dialogues*. Cambridge: Cambridge University Press.
- The Examination of Mrs. Anne Hutchinson. 2009. *Examination of Anne Hutchinson*, 366-91. *EBSCOhost*.
<<http://search.ebscohost.com/login.aspx?direct=true&db=a9h&AN=21212321&lang=ja&site=ehost-live>> (Accessed 21 July 2016).
- The Examination of Mrs. Anne Hutchinson at the Court at Newtown. 1990. In David D. Hall (ed.), *The antinomian controversy, 1636-1638: A documentary history*, 2nd edition, 312-48. Durham & London: Duke University Press.
- Fillbrandt, Eva-Liisa. 2006. The development of the mandative subjunctive in the

- Early Modern English period. *Trames: A Journal of the Humanities and Social Sciences* 10(2), 135-51. <<http://www.kirj.ee/public/trames/content.htm>> (Accessed 14 September 2015)
- Görlach, Manfred. 1991. *Introduction to Early Modern English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hosmer, James Kendall (ed.). 1908. *Winthrop's journal, 'The history of New England', 1630-1649, volume 1*. Charles Scribner's Sons. Reprinted in Elibron Classics (2005). *Internet Archive*. <<https://archive.org/details/winthropsjournal00wint>> (Accessed 11 August 2015)
- Hundt, Marianne. 2009. Colonial lag, colonial innovation or simply language change? In Günter Rohdenburg & Julia Schlüter (eds.), *One language, two grammars? Differences between British and American English*, 13-37. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kytö, Merja. 1991. *Variation and diachrony, with Early American English in focus: Studies on CAN/MAY and SHALL/WILL*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Moessner, Lilo. 2006. The subjunctive in Early Modern English adverbial clauses. In Christian Mair & Reinhard Heuberger (eds.), *Corpora and the history of English: Papers dedicated to Manfred Markus on the occasion of his sixty-fifth birthday*, 249-63.
- Nevalainen, Terttu & Helena Raumolin-Brunberg. 2011. *Helsinki Corpus: Early Modern English*. <<http://www.helsinki.fi/varieng/CoRD/corpora/HelsinkiCorpus/earlymodern2.html>> (Accessed 26 April 2017)
- Oxford English Dictionary*, 2nd edition. 2009. CD-ROM Version 4. Oxford: Oxford University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Rissanen, Matti. 1999. Syntax. In Roger Lass (ed.), *The Cambridge history of the English language, volume III: 1476-1776*, 187-331. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rohdenburg, Günter & Julia Schlüter (eds.). 2009. *One language, two grammars? Differences between British and American English*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Visser, Frederik Theodor. 1966. *An historical syntax of the English language*, Part 2. Leiden: E. J. Brill.
- 荒木純子. 2005. 「ピューリタン社会における性差の形成－ニュータウンでの法廷におけるアン・ハッチンソンの審問」遠藤泰生(編)『史料で読むアメリカ文化史① 植民地時代 15世紀-1770年代』208-23. 東京：東京大学出版会.

千葉修司. 2013. 『英語の仮定法—仮定法現在を中心に—』 東京： 開拓社.
 中尾俊夫・児馬修(編). 1990. 『歴史的にさぐる現代の英文法』 東京： 大修館書店.
 浦田和幸. 2015. 「英語の接続法—現代イギリス英語における命令的接続法の事例研究—」 『東京外国語大学論集 (Area and Culture Studies)』 91、229-46、東京外国語大学学術成果コレクション.
 <<http://id.ndl.go.jp/bib/027054215>> (Accessed 6 March 2017)

補遺

「審問」+*WJ* の *that* 節を導く主節動詞別の表現形態分布および助動詞構文の法助動詞分布 (3 人称単数主語現在のみ)

主節動詞 (見出し語)	表現形態の分布			出現頻度 合計	助動詞構文分布						
	仮定法	助動詞 構文	直説法		should	shall	must	would	might	may	could
(be) sure		2		2	2						
desire	1	20		21				2	16	2	
exhort	1			1							
expect		1		1				1			
find			1	1							
hear		1		1						1	
intend		1		1	1						
look		1		1	1						
order	2	12		14	11	1					
provide		1		1	1						
request		2		2					2		
say		8	3	11	1			5			2
see		7	5	12	3			1	1		2
suppose		6	1	7	2			1	2	1	
swear		1		1				1			
tell		7		7	3			1	1		1
think		6	9	15	1			2	3		
頻度合計	4	76	19	99	26	1	1	14	25	4	5
比率	4.04%	76.77%	19.19%	100.00%	34.21%	1.32%	1.32%	18.42%	32.89%	5.26%	6.58%